

「エンター・ザ・ボイド」 ★★★

2 0 1 0（平成 2 2）年 4 月 1 9 日鑑賞<角川映画試写室>

監督・脚本・製作・カメラ・編集：ギヤスパール・ノエ
リンダ（オスカーの妹）／パス・デ・ラ・ウエルタ
オスカー（麻薬ディーラー）／ナサニエル・ブラウン
アレックス（オスカーの友人）／シリル・ロイ
ビクター（オスカーの友人）／オリ・アレクサンダー
ビクターの母／サラ・ストックブリッジ
ブルーノ（麻薬密売人）／エド・スピアー
マリオ／丹野雅仁

2 0 1 0 年・フランス映画・1 4 3 分

配給／コムストック・グループ

<『アレックス』から 7 年！また難解な作品が！>

全世界を震撼させた衝撃作『アレックス』（0 2 年）から 7 年。フランスの鬼才ギヤスパール・ノエの最新作が再び R - 1 8 指定で登場したが、『アレックス』と同様、またまた難解。

『アレックス』は何ととってもイタリアの名花モニカ・ベルッチをボロボロにしよう 8 分間にも及ぶレイプシーンが衝撃的だったが、全編を貫く男女 3 人による哲学論議は難解そのものだった（『シネマルーム 2』1 6 5 頁参照）。本作も折りにふれてチベット宗教が持ち出されるうえ、警察官から発射された弾丸によって死亡したオスカー（ナサニエル・ブラウン）の魂が肉体から離脱し、愛する妹リンダ（パス・デ・ラ・ウエルタ）の住む東京の街をさまようという物語だから、難解そのもの。

「島原の乱」に敗れた無念の思いからこの世に転生してくる天草四郎を主人公とした『魔界転生』（0 3 年）では、柳生十兵衛や宮本武蔵らが次々に転生してきた（『シネマルーム 3』3 1 0 頁参照）が、チベット宗教にも輪廻転生の教えがあるらしい。さて、オスカーの魂は今どこを輪廻中？

<ギヤスパール・ノエ監督はなぜ舞台を東京に？>

来る 5 月 1 日からはついに北京オリンピックに続いて、中国の威信をかけた上海万博が開幕する。かつて上海は「東洋の摩天楼」と呼ばれ、西欧列強の権益が渦巻く魔都とされたが、今や超現代的な大都会に様変わり。幼い頃に両親を交通事故で失ったオスカー、リンダ兄妹だったが、今オスカーがリンダを東京に呼び寄せることができたのは、オスカーが薬物ディーラーとして金を稼ぎまくったため。つまり、本作はオスカーを中心とした若者たちのドラッグとセックスそして欲望と犯罪をテーマに混沌とした世界を描くものだが、ギヤスパール・ノエ監督はそんな映画の舞台をなぜ東京に？

1 0 0 年前ならきっと上海が最適な舞台だっただろうし、3 0 ～4 0 年前なら人種問題とベトナム反戦運動などで街が荒廃し、年がら年中ドラッグ問題に悩むアメリカのニューヨークが最適だったはず？本作には、こりゃまるで天国？と思わせるような原色をたっぷり使った空間やネオンが光り輝くラブホテル街など、何ともサイケデリックでケバい東京の街が登場する。これはひょっとして、ギヤスパール・ノエ監督には政治が混沌し経済的にも下降の一途をたどっている現在のニッポン国の魔都 T O K Y O こそ、こんな混沌とした映画の舞台にふさわしいと映ったため？

<日本ではこんな映画は上映しない方が・・・？>

私は毎月 1 回東京に出張しているが、私の印象では、東京は本作が描くほど欲望と犯罪そしてドラッグが渦巻く街ではない。もっとも、私は新宿歌舞伎町あたりには行ったことがないが、そこでは中国マフィアが闊歩している（らしい）。そういう所に行くと、本作の視点の方が正しいのかも？

日本の芸能界におけるドラッグ汚染はのりピーこと酒井法子や押尾学の例をひくまでもなく深刻。そして、本作に登場するオスカーや麻薬密売人のブルーノ（エド・スピアー）らの姿をみていると、東京では覚醒剤、コカイン、マリファナ、ヘロインという一般的な（？）薬物の他、L S D や M D M A（合成麻薬）など各種ドラッグが、金さえ払えばいくらでも手に入ることがよくわかる。オスカーはその売買を仲介して金を稼ぐだけではなく、自ら体験してその「良さ」を知っているから、呼びよせた妹のリンダや友人のビクター（オリ・アレクサンダー）にもそれを勧めていたのは当然。オスカーが警察に急襲されて死亡したのも、ビクターの要請でバー「ザ・ボイド」にドラッグを持って行った時だが、それって偶然？それとも・・・？

それはともかく、本作をみていると全編ドラッグ、ドラッグ、ドラッグのオンパレード。したがって薬物撲滅キャンペーンが張られている今、日本ではこんな映画は上映しない方が・・・。

<こりゃ、ホントに目が疲れる！>

動体視力の衰えた団塊世代には、パソコンの画面をものすごいスピードで動かす若者の能力にはとてもついていけない。本作ではそんなイヤな思いを最初からさせられるうえ、こりゃホントに目が疲れる！

映画が始まるとすぐに軽快なテンポの音楽が流れ始めるのはいいが、それに合わせてキャストやスタッフたちの字幕がものすごいスピードで映し出されていくから、それを見る（読む）のは大変。また、プレスシートによると本作の撮影を担当したのは、『アレックス』をはじめ、『エコー』（0 4 年）、『変態村』（0 4 年）、『デス・サイト』（0 4 年）、『変態島』（0 8 年）など、ヨーロッパの異形な作品を次々と手掛けている名手ブノワ・デビーとのこと。その手法は、最近の邦画のようにカメラを固定させてじっくり 1 つのシーンを撮るのではなく、かなりのスピードでカメラそのものが移動していくから、スクリーンを目で追っていくのはしんどい。とりわけ、後半からはなぜか東京の街を移動しながら上空から映すシーンが増え、また人間の営みを上空から撮るシーンが多くなるから、それを追っていくのもしんどい。さらに本作の映像の特徴は原色をふんだんに使ったカラー。美しいといえば美しいが、ケバいといえばケバいので、これもかなり目が疲れる。したがって 2 時間 2 3 分の本作を見終わると、どっと目が疲れてくるから、目薬が必需品？

<R - 1 8 指定の理由は？長尺が描く結論は？>

本作は『アレックス』に続いて R - 1 8 指定された。それが当然と思えるのは、ラストに向けて延々と続くセックスシーンの数々。これは、かつてバブル華やかしり頃の雄琴温泉では？ついそんな風に思ってしまうほど、ケバケバしいラブホテルが東京のど真ん中に林立！

両親と死別したときから「ずっと一緒にいよう」と固い約束を交わしたオスカーとリンダ兄妹だったから、オスカーが死亡してもその魂がリンダから離れようとしなかったのは当然。そんなオスカーの魂が映画がラストに進むにつれて向かっていくのは、ラブホテルで愛を求め合う男女たちだが、それはなぜ？

他方、今やすっかり女として成長し、ストリップ劇場のポールダンサーとして働いているリンダがいろいろな男から言い寄られたのは当然。そんなリンダの恋人はマリオ（丹野雅仁）だったが、この 2 人の愛は意外と順調に進んでいるようだ。本作は 2 時間 2 3 分という長尺であるうえ前述のように目が疲れる映画だから、終盤になるとかなり疲れてくるが、そこで俄然活発になるのがセックスシーンの数々。ラブホテルの中で営まれる何組かの男女のセックスシーンは、こりゃまるで A V ビデオ？と思わせるものだ。そして、本作で特徴的なことは、激しく求め合う男と女の接合部からまばゆいばかりの光が発してくること。それはまるで煙のように立ち上ってくるわけだが、こりゃ一体ナニ？これが芸術か？ポルノか？はたまた、まともな自己主張か？単なるヒネリか？の判断は難しいが、本作はカンヌ国際映画祭やサンダンス映画祭を熱狂させたいらしい。プレスシートには「これまで以上に強烈でセンセーショナルな刺激で見る者を圧倒する。」と書かれている。

また、本作を見れば R - 1 8 指定の理由はよくわかるが、2 時間 2 3 分の長尺が描く結論はあっと驚く意外なもの。さあ、こんな映画に対するあなたの評価と採点は？